

## 子どもの感性を育てる教育について（その3）

—— R・シュタイナーの幼児教育における「ファンタジー」の扱いについて ——

菊池 誠子

### はじめに

R・シュタイナーは「人生の目的に適い、子どもの活動意志に適ったものを正しい方法でおこなわせると、非常に意味深い教育作用が期待できる<sup>1)</sup>。」と述べている。これまで「子どもの感性を育てる教育」を大きなテーマとして、感性に関わるさまざまな領域の中からいくつかの要素を取りあげ、各々の要素を教育の中でどのように留意して扱えばよいかを考察してきたが、これはシュタイナーが述べたように「子どもの意志に適った正しい方法」を追求することに他ならない。本稿は（その3）として子どものファンタジー（現実の制約から解放された自由奔放な空想）を小テーマとして取りあげ、シュタイナーの幼児教育におけるファンタジーに関わるプログラムの中から特にメルヘン（空想的、神秘的な内容の短いお話）の扱いとその周辺をめぐって考察を進めるものである。

まず子どもにとってファンタジーがいかに重要なものであるか、シュタイナーは1923年の講演で次のように述べている。

もし霊的内容を理解しうる人物に育てたいと思うなら、主知主義的な形体をとったいわゆる合理的精神を、できるだけおそくまで、子供に植えつけないようにしなければなりません。たとえ今日の文明がまったく目覚めた人間を必要としているにしても、人生へ旅立つその発端においては、幼児をあの優しい、イメージ豊かな夢想体験のなかに、できるだけ長く、イマジネーションとファンタジーと、そして没知性的な状態のなかで、生活すべきです。なぜなら、幼児の有機体が、その発端において、知的でない生活環境のなかで強め

られたとき、その将来が正しい仕方、今日の文明に必要な知的な態度を発展させることができるからです<sup>2)</sup>。

ここで述べられている〈霊的内容〉とはR・シュタイナーの掲げるアントロポゾフィーに基く人間感…人間存在の意味を知り自己現実を図る…を指している。子どもが真の意味での「自由」を獲得した人間になるためには、成長する三つの段階<sup>3)</sup>にそれぞれふさわしい働きかけをしなければならない。そしてその第一段階である幼児期には、優しく、イメージ豊かな夢想体験の中にできるだけ長くとどめておくことが必要なのである。また「没知性的な状態」の中で幼児を生活させるべきであるということも強調しているが、これは決して知的環境を否定するものでなく、むしろ将来知的理解を高めるためにもある時期（第一・七年期）まではこれから積極的に遠ざけ、よりファンタジックなものの中に子どもを置いておこうとするものである。このことは子どもに背のびさせず、一番自然な状態の中で、さまざまな体験をさせ、その中で感性をゆっくり育てていくうえでたいへん重要なことである。子どもの活動は子ども自身の本質から発展したものでなければならず、ファンタジーはこの本質のもっとも重要な要素の一つであると言える。では子どもがより正しい方法で、ファンタジーの中に浸るためにはどのような教育上の留意が必要であろうか。

### 一 シュタイナー幼稚園におけるメルヘンの扱いについて

子どもがファンタジーの世界に入り込む最も身近な方法はメルヘンに触れることである。今

昔東西を問わず子どもはお話が大好きである。R・シュタイナーによれば子どもの魂は生まれる以前の世界を引きずってまだ大地にしっかり足をつけることができずフワフワと空中を漂っている状態にあるという。したがって現実社会の中に生きる大人と違ってよりイメージーション（目の前にないものや現実には存在しないものを心に描く能力）が拡がりやすく、ファンタジーの世界に浸ることは子どもの魂にとって最も自然なことであり、その中で得られるさまざまな疑似体験によって、子どもが生まれながらに持っている感性も知らず知らずのうちに育っていくと考えられる。そのようなメルヘンの扱いは日本のそして世界の幼児教育において重要な分野をしめている。特に世界に約1000あるシュタイナー幼稚園では、前に述べた理由からメルヘンはそのプログラムの中でも特別な扱いをされている。その一つとしてアメリカ・カリフォルニア州サクラメント市郊外のシュタイナー幼稚園における実践例<sup>4)</sup>をあげ、その教育的意味を考察する。

まず幼稚園における生活時間…プログラムであるが、これを1日の「リズム」と名付ける。シュタイナー教育では音楽的意味でのリズムはもちろん宇宙的意味でのリズムも大変重視される。特に幼児期において週や一日の中でくりかえされるリズムは大切に扱われる。くりかえしがもたらす期待と成就が幼児の心の安定をもたらすからである。このリズムは家庭においても重要視され園の指導によって家庭内にあっても毎日同じ時間に、ある決まったことをする（例えば夜寝る前にお話を聞く）ことが父母に指導されている。次にあげるのは「白ばらぐみ」（約20名混合クラス）の1日のリズムである。

〈1日のリズム〉

- 8:00～ お庭で遊ぶ
- 8:20～ モーニングサークル
- 8:40～ スナックの準備と自由遊び
- 9:40～ みんなでお片づけ
- 9:55～ Lullaby（小休止）
- 10:05～ スナック

- 10:25～ お皿を洗う
- 10:35～ 外遊び
- 11:25～ （曜日ごとの遊び）
  - （月）ペインティング
  - （火）おはなし
  - （水）散歩（11:00～）
  - （木）おはなしと蜜ろう粘土
  - （金）劇あそび又は人形劇
- 12:00～ さようならのサークル
- 12:15～ おかえり又はランチ

〈1日のリズム〉の中でメルヘンと直接関わっているのは火曜日の「おはなし」と木曜日の「蜜ろう粘土」そして金曜日の「劇あそび又は人形劇」であるが、その前に毎朝行われる「モーニングサークル」が子どものファンタジーの世界への誘いに大きな役割を果たしている。

「モーニングサークル」は登園してくる子どもたちが一とおり揃った頃に先生のきまった呼びかけの歌で始められる。それはピアノ伴奏を伴った活発な元気な「行進曲」風な歌ではなく、もちろんレコードやテープなどの機械音による歌でもなく、どこからともなく聞こえてくるような静かな静かな（*p*か*pp*ぐらいの）ペンタトニックの、五度を隔てた二音が往復するだけのメロディである。



素朴なこのうた声を耳にすると子どもたちはそれまでの自由な遊びをやめて先生のいるじゅうたんの上に集まってきて一つの大きな円（サークル）を形づくる。シュタイナーの理論に基づいて決して明る過ぎないように作られている室内の「季節のテーブル」のうえのろうそくに灯りがともされる。朝起きてまだ覚めやらぬうちに登園して、さあこれから幼稚園での一日が始まるよという心の準備をするひとときである。ゆらめくろうそくの炎の中で耳にする静かなペンタトニックのメロディーに浸りながら子どもの心も少しずつ目覚め、幼稚園という一つの世界へ気持ちがきり替わっていく。はじめに先生が

朝の詩を静かに唱える。それからそれに続いてみんなで手をつなぎ歩きながらそして簡単な動きをつけながら「あさのうた」を歌う。

あさのうた

good mor-ning dear earth, good mor-ning dear Sun, good  
mor-ning dear stones, and the flo-wers every-one, good  
mor-ning dear bears, and the birds in the tree, good  
mor-ning to you, and, good mor-ning to me.

(訳)おはよう大地  
おはよう太陽  
おはよう石たち  
おはよう花たち  
おはよう動物たち  
おはよう鳥たち  
おはようみなさん  
そして  
おはよう わたし

あさのうたはかけ声もなく、先生がああ静かなうた声で歌い始めると自然に子どもたちも次々と静かにうたい出す。ここでは歌い出しがそろっていることや元気に立派にうたうことなど全く問題とされない。子どもがそれぞれの世界の中で一番自然であるやり方で声を出すのである。歌詞は宇宙の中の太陽と大地にそして地球上の鉱物・植物・動物にそして人間に、さいごに自我の目覚めを象徴する「わたし」におはようと呼びかける内容でR・シュタイナーの人間学の根本と深く関わっていながら、子どもにとってはとても自然なもので、ペンタトニックの気分も合わせもっているやさしいうたである。あさのうたが終わると「季節のサークル」となる。これは季節の特徴を生かした日常的な題材のお

話を先生が語りながら、時計まわりに歩いたり、ステップしたり、お話の間々に挿入されるうたと共に体を大きく動かしたり小さく動かしたり、指あそび手あそびをしたりまた立ち止ってお話をきいたりする一連のお話し遊びとも言えるものである。この遊びも春夏秋冬それぞれ3カ月間ずつ毎朝同じことがくり返され、一年の始まりである秋から夏へと内容的に長くなっていく。この遊びによって一日の体を動かす準備がなされ、一年を通しては片足のジャンプ、ホップで集中力やバランス力が身につく、指先のゲームやフィンガーニッティング（編み物）で小さい動きができるように準備をしていることにもなる。また、先生がうたう歌や、詩をいっしょにうたい、唱えることによって子音や母音をはっきりきちんと言えられるようになる。このように「モーニングサークル」は子どもの心の準備と体の準備を整え幼稚園での一日のリズムの始まりをスムーズにする大事な役目を果たすのである。

モーニングサークルで家庭から幼稚園の生活の中へ入り込んだ子どもたちはメルヘンの世界でよりファンタジックな世界を体験する。ここでは一つのメルヘンは少なくとも三週間にわたって、語り聞かせから始まって、蜜ろう粘土細工、人形劇、劇遊びなどさまざまな形をとって展開される。それぞれの遊びがR・シュタイナーの人間学に基づいて多くの点で考慮されていることは勿論のことである。またそのことが子どものイマジネーションを拓けるうえで重要な役割を果たしている。メルヘンの題材として主にグリムなどのドイツのお話や、ロシアの民話が用いられるが、ここではサクラメント・シュタイナー幼稚園で実践された日本の昔話から「おつる」（つるの恩返し）とその展開の過程について先ず述べ、後にファンタジーの扱いとの関わりについて考察点を述べることにする。

#### ①おはなしを聞く

子どもが先生のまわりを集ってお話を聞くと言う形であるが、このとき原則として絵本などを提示しながらということはずせず、もっぱら先生がお話をあらかじめ覚えて話をする。また大

げさな感情表現をすることなく、淡々と静かに話される。お話の始まる前にキンダーハープ（ライアー）を先生が奏でる。うたのないペンタトニックの短いメロディである。「…恩返しをしたおつるが鶴の姿に返って空を舞って飛び去る」お話が終わると、先生が静かな声で、無伴奏で、ペンタトニックの短い即興的な歌をやさしく歌う。

このような純粹にお話を聞くという形式は毎週火曜日に行なわれ、一度だけでなく3週に渡ってくり返される。

### ②蜜ろう粘土

木曜日にはみつ蜂の巣から取れるろうで作られた蜜ろう粘土での遊びがある。この素材は子どもがまちがって口に入れても害がなく、人肌と同じ温度で柔らかくなり指先でこねているうちによい香りを放つようになる。子どもはこの香りの中でイメージーションを豊かに膨らませるのである。蜜ろう粘土は3cmぐらいの小さい一かたまりを各色（10色ぐらい）用意し、子どもたちに好きな色を一個だけ選ばせる。何を作るかは子どもの自由で、創造性のおもむくままに作らせる。このとき子どもの心の中に火曜日にきいたおはなしのイメージが影響を及ぼして、つるやおじいさん、おばあさん、森の木、動物などが作られることも多い。でき上がった作品は小さいテーブルやお盆のうえに飾られみんなで鑑賞する。粘土細工は造形技術的な意味で細かい指先の作業にも意味があるが、そのイメージを拡げファンタジックな世界を広げる点においても特別な意味をもつ。

### ③人形劇

金曜日は劇遊びの日である。火曜日に聞いたおつるのお話がまだぼんやりと心の中に残っているうちに、より明らかな形を示してくれるのがこの人形劇である。子どもたちがまだ外遊びに興じている間に先生がステージを整える。ステージとは言ってもごく素朴なものである。床（じゅうたん）の上に丸めた布などで凹凸をつけ大きな白い木綿の布をかぶせる。雪野原ので

き上りである。雪野原の一方の端に木でできたおじいさんの家。野原のあちこちに松ぼっくりともみの木の枝で、林をつくる。登場人物の人形も用意されると、全体をおおうように大きな黄色の美しい絹の布がかけられる。子どもたちはこのステージのまわりに集まり、これから始まるメルヘンの世界に、その黄色い布の下の世界に期待するのである。始まりはお話の時と同じキンダーハープのメロディである。フワッと黄色い布がとり除かれるとそこはもう完全にお話の世界である。先生が「おつる」の話をすすめながら人形をゆっくりと動かす。人形の胴体は筒状に縫ったフェルトにウール綿をつめたもの、頭部も綿布にウール綿を丸くくるんだもので毛糸の髪がついているものの目鼻口のない非常にシンプルなものである。（写真下参照）このわずかに畳一枚程度のステージの中にくり広げられる世界に没頭するとき、そこは広大な冬の野原となって幼児には時には肌を刺す寒さや、しん閑とした中にくり返される機織の音や、時の流れが確かに感じられるのであろう。お話の終りには、先生のうたが静かに流れ、あの黄色い布がかけられて世界が閉じられる。次の週の人形劇の時間には子どもたち自身がステージをつくり、先生が見せてくれたように人形を操って遊ぶという遊びへと発展していくことになる。



### ④劇あそび

お話しから人形劇を経て子どものイメージもある程度確かなものとなってくるところ、劇あそびが実践される。この劇あそびはあらかじめせりふや動きが決まっているものでなく、ステージといえるほどのものもない。また子どもが自

分で思いつくままに言葉を発したり、自由に動いたりということも第一段階では全く無い。子どもたちはサークル（円）をつくり、役割とそれに見合った素朴な衣装（絹の布）をつける。おつるが織った美しい布の役もある。キンダーハープで始まり、先生がお話を語りながら子どもの手を取って歩かせたり導いたりする。身にまとった絹の布が美しくゆれる。こんな単純な動きの中でも先生の話に身を委ね、お話の登場人物になりきっている。真白い布をまとったつる役の子が空高く飛び去ってお話は終る。最後にペントニックのうたとキンダーハープ。この劇遊びも、次の段階では、役をとりかえたり、自分の意志で自由に動いたりと少しずつ遊びが発展していく。

このようにお話を聞くことから始まって、時には蜜ろう粘土によってその世界に浸り、人形劇を見てはイメージを拡げ、次の週には自らが登場人物になりきってメルヘンの世界に浸り、シュタイナーの述べる子どもにとって必要なファンタジーを体験するのである。

## 二 考察

シュタイナー幼稚園におけるメルヘンの扱いとその展開の例をいくつか述べてきたが、これらの中には子どもがファンタジーを体験するうえで重要な要素が存在する。E・M・グルネリウスは「昔から伝えられてきた童話や物語は、外的な出来事ではなく、内的な体験内容を表現している」とし、そのようなお話の時間は子どもたちにとって「人間の内面生活におけるこのうえもなく深くて繊細な心の営みを教える、きわめてたいせつな教育の機会なのである<sup>5)</sup>。」と述べている。とすれば、その内面生活の繊細な営みにふさわしい音の世界や色や形などの世界というものが存在するはずである。そこでこれらの二つの世界を、子どもの感性に聴覚から働きかける要素と視覚・触覚から働きかける要素とに分けてその各々について次に考察する。

### ①音の世界とファンタジー（聴覚的要素）

ここで重要な役割を果たしたのは、おはなし・人形劇・劇遊びの始まりと終りに奏されたキンダーハープの音色と保育者のうた、お話の音色である。子どもたちをファンタジーの世界に導くためにどのような楽器が使われ、どのような曲(うた)をどのように奏する(うたう)か、またどのように話すかが、シュタイナーの人間学に基いて選択されている。キンダーハープのモデルは古代エジプトのハープのような形をした指ではじいて演奏する弦楽器や、ギリシアのキトラである。古代の人々にとって音楽は空間的には存在しない、見ることもさわることもできない不思議な神秘的なものであったその時代の音をキンダーハープは再現する。その音色は、原音楽的体験が子どもの夢見心地な魂と最も自然な形でつながりをもつというR・シュタイナーの理論によく適っている。彼は、音楽において、かつての霊的な時代からのちの物質的な時代への移行に際して、人間はイマジネーションを徐々に失ってきたとし、一方幼児期の人間の活動は人間が死から再受肉までのあいだに霊的な世界で行ったことの変容したものであるとしている<sup>6)</sup>。すなわち現代失ったイマジネーションを幼児期にある人間はまだ持っている、その中で活動しているのである。とすれば、そのイマジネーションの中であるがままに生活させることが幼児にとって最も自然な形となるであろう。古代の音を彷彿させるライヤーの音色はこの感覚に最も適していて、イマジネーションに富むメルヘンの世界へ子どもを導く最適の楽器であると言える。

次にファンタジーのためにどのような曲(うた)が選択されるかは、D・ウィンターが「子どものためにうたを選ぶことはそれ自身が芸術の領域にある<sup>7)</sup>」と述べるように重要な課題であるが、キンダーハープの古代的な音色を選択したのと同じ理由から音階としてのペントニック<sup>8)</sup>による曲が最もふさわしいと言えるであろう。

保育者のうたのうたい方、声については、一見ただ静かにうたっているだけのように聞こえるが、その根底には大変深い配慮がなされてい

る。D・ウィンターは子どものためにうたうことには特殊な方法が要求されると述べる<sup>9)</sup>。すなわちそれはやさしい、流れるような、純粋な、不自然でない、そしてこのうえなく喜びに満ちたものでなければならないとし、正しい歌を選択し、シンプルにうたい、歌のもつ気分を注意を向けるなら、そのうたは、おのずから正しい方法でうたうであろう、としている。また、子どもをこのように育てたいという強い意志の現れが、ともすれば外の世界へ強く表出しがちである(例えば、子どもの注意を引くためにより豊かな声量で、情感たっぷり、誇張してうたうなど)が、子どものファンタジーの世界にとってそれは現実に引き戻される以外の何ものでもない。魂にとって自然であることが必要とされるのである。D・S・ウィンターは次のように強調している。

今日、我々は“うたうこと”へのアプローチを意識的に行おうとして多くの圧力にとり囲まれている。いかにうたうかを学ぼうとするとき、何をするかということより、何をしないかを学ぶことのほうがずっと大変なことである<sup>10)</sup>。

このことは現代の発声学においも重要なヒントとなるものである。また大勢の中で、あるいは騒がしい中で静かに語ることは勇気のいることである。しかしファンタジーの世界に心を浸そうとするときは、音の世界のあり方にもそのような配慮が必要であると考えられる。シュタイナー幼稚園において保育者が子どもたちをモーニングサークルへと誘ううた、あさのうた、おはなしに挿入されるうたは、この意味で最もふさわしい方であると言えよう。このようなうたい方は芸術的な発声法からみれば特筆すべきものではないが、子どもの心に直接浸透していく、リラックスした、自然な温かい音色は子どものファンタジーにとって十分価値あるものである。シュタイナーの「治療教育を研究する仲正雄氏による『声の実習』の報告<sup>11)</sup>」によれば、声には外に向かって音を形作る方法と内に向かって音をひびかせる方法とがあり、後者は体全体がくつろいでいて楽な呼吸を必要と

するとしている。そしてまた、この声は子どもの頃に母親の背中で聞いた子守歌のようになつかしいひびきである、とも述べている。

音の世界に関わるもう一つの要素として、保育者が子どもたちにおはなしを語る時の声色(声の音色)がある。シュタイナー幼稚園で行われていたように、おはなしをするときに感情を表面に出さずに淡々と語るということは、保育者自身がことばによって得たイメージや感情を子どもに押しつけないようにするということである。先に述べた通り、子どもは大人よりもっと鋭い感覚の世界に生きているので、子どものイメージの世界にあるがままに入りこんでいけるようにするべきである。

このように見えてくるとファンタジーと音の世界との関わりにはある方向が示されている。一つは子どもを必要以上に現実に目覚めさせるような音量を慎しみ、子どもの感性を刺激し過ぎないように大人が気を配ることであり、大人の感情経験を子どもに知らず知らずのうちに押しつけることがないように配慮することである。シュタイナーによれば子どもは「模倣する」存在である。保育者の、自由に喜びに満ちた音の世界へ導こうとする姿勢が反映してこそ、子どもたちはよりファンタジックな世界を味わうことができるようになるであろう。

## ②色・形・素材の世界とファンタジー(視覚・触覚的要素)

メルヘンが色・形・素材の世界と結びつくのは、シュタイナー幼稚園においては、蜜ろう粘土遊びや人形劇、劇遊びを通してである。子どもに与えられるのはたった一色の粘土の固まりである。これを自分の手の中で、自分の体温と一体化させることによってイメージの中に現われたものを形づくる過程で、たとえそれが大人の目で見て鳥とは全く思えないものでも、羽ばたくつらとなったり、森の木やおじいさんとなって子どもの心に再現する。この過程を日本でシュタイナー幼児教育を実践する高橋弘子氏は「ファンタジーが高まると、造形された粘土のうえに木の小人や動物たちが来て、お話が始まること

もあります。幼児期に、手指を使って大地の素材でファンタジーを表現していくことは、ことのほか大切です。そして彫塑は生命力を強めるのです<sup>12)</sup>。」と評価している。すなわち子どもはそこに見えているものの周りに、見えない世界を広げる能力をもっているということである。このことは人形劇の実践の中でも言えることである。一枚の白い布は雪野原に、松ぼっくりは森の木々として子どもの心に生き生きと見えている。たとえ人形に目はなくても、おつるを迎え入れるときのおじいさんの目は優しい目に、織物ができると驚いた目に、別れの日は悲しい目になって子どものファンタジーの中に現れるのであろう。シュタイナーは次のように述べる。

例えば精巧に作られた人形よりも、布切れで作られた素朴な人形の姿にふれて、よりいきいきとした姿を、心魂活動によって補ってイメージすることができるのが子どもにとって大きな喜びになる。反対に精巧な美しい人形を注視することによって、繊細に目覚めていくファンタジーを遮ることになる。幼児期の子どもにおいて、このことはとくに考慮されなければならない<sup>13)</sup>。

また、素材にこだわるシュタイナー教育では自然の素材を大切にす。人形の素材はもちろんステージを覆う布、劇あそびの衣しょうの布やその染色の材料を選ぶときに、もし子どものファンタジーにとって良い影響を及ぼさないと考えられるもの(例えば化学繊維やプラスチックなど)は排除される。この姿勢はS・ブラバントが「子どもは色や形など視覚的なものを大人が感じるのとは比較にならないほど深刻に、そして決定的に、それを自分の無意識の奥深くまで作用させる。したがって子どもの周囲に美しいものをいつも提出することが大事である<sup>14)</sup>。」と述べる通りである。絹やウールなど自然の素材を視覚や触覚を通して感じるものは、子どものファンタジーを目覚めさせず、むしろ素材ゆえに可能な発色の美しさを伴って、子どものイメージーションをかきたてることになるのである。

このようにメルヘンからさまざまな遊びに発

展するなかで聴覚、視覚、触覚、嗅覚を通して子どものイメージーションに働きかけ、子どもらしいファンタジーの世界を広げるために、いくつかの「正しい方法」を学んだ。子どもはこの世界から得たものを糧としてまた次の遊びへとイメージを広げていく。そのように子どもを子どもらしい世界に留めておくことが子どもの感性の育成にとっても大切なことである。

## おわりに

幼児のファンタジー体験について、サクラメント市シュタイナー幼稚園の例をとって、主にメルヘンの扱いから、その聴覚的要素と視覚的要素について考察した。もちろんメルヘンのみがファンタジー体験の糸口であるというわけではなく、幼稚園で展開されるさまざまな遊びや自由な活動の中にもファンタジーの世界は存在し、お互いに影響しあって子どもの健全な発達を促していると考えられる。グルネリウスが「ファンタジーは子供の行動にあたたかさや親密さを加えます。ファンタジーの働く領域のなかでこそ、夢みがちな子供の生き方が守られ、子供の内的特性がさまたげられずに自己を発揮することができるのです。ファンタジーと対極にある、冷静な、抽象的な、そして組み合わせ的な遊びは、現代の病い——自己喪失の、興味にも情熱にも欠けた、ただやみくもの忙しさ——の支配を助長します。ファンタジーによる遊びは、大人になってから、自分の仕事に心から、全人間的に取り組むことができるというもっとも価値ある能力のひとりの先ぶれなのです<sup>15)</sup>。」と述べるように、先を見通した幼児期のあり方を考慮し、子どもを無理に目覚めさせるものを排除し、子どもの魂に添った教育がどのようにあるべきかを考えなければならない。現在日本における幼児教育の五つの領域のねらいと内容が正しく理解され実践されるために子どもにとって何が真に価値あるものなのかを見極める大人の感覚が保育の中に必要である。子どもの感性がのびのびと育ちさまざまな分野の中で生かされるよう、子どもの教育のあり方について考察をさらに進めたい。

注

- 1) R・シュタイナー著 西川隆範訳「シュタイナー教育の実践」 イザラ書房100頁
- 2) E・M・グルネリウス著 高橋巖・高橋弘子訳「七歳までの人間教育」 フレーベル館102頁
- 3) 拙著「子どもの感性を育てる教育についての一考察」 盛岡大学短期大学部紀要第3巻
- 4) 3・4・5歳児混合でクラス約20名が2クラスの小規模な幼稚園に隣接するシュタイナー・カレッジにおいて1996.7.21～8.11に夏季講習が行われた。この実践例はその中の幼児教育のプログラムのものである。
- 5) E・M・グルネリウス著「前掲書」62, 64頁
- 6) R・シュタイナー著 西川隆範訳「音楽の本質と人間の音体験」 イザラ書房 66, 103頁
- 7) D・S・ウィンター, T・リチャード著「Toward Freedom in Singing」 ルドルフ・シュタイナー・カレッジ出版 29頁
- 8) 拙著「子どもの感性を育てる教育について(その2)」 盛岡大学短期大学部紀要第5巻
- 9) D・S・ウィンター著「前掲書」29頁
- 10) D・S・ウィンター著「前掲書」17頁
- 11) 1996日本アントロポゾフィー協会12月号会報より  
報告者 竹永圭一郎
- 12) 高橋弘子著「日本のシュタイナー幼稚園」 水声社 146頁
- 13) R・シュタイナー著「シュタイナー教育の実践」 101頁
- 14) 高橋巖, S・ブラバント, J・シュナイダー著 高橋巖訳「シュタイナー教育と子どもの暴力」 イザラ書房 83頁
- 15) E・M・グルネリスル著「前掲書」 71・72頁